

メトロポリタン

★の語
星物

十三夜で季節感感じて

◇10月5日 あすは十三夜です。十三夜は旧暦9月13日の月を見る行事ですが、まだ満月より前なので月が少し欠けています。また月の出の時刻が早く、東京では午後3時48分に月が昇ります。十五夜が芋名月といわれるのに対し、十三夜は栗名月、豆名月といわれます。季節が進み、お供えの作物も変わります。

(遠藤勇夫)



あるが えつこ
有賀 悦子氏

帝京大学医学部緩和医療学講座教授・診療科長

「がんを知ろう」 子供たちに教育

1961年生まれ。東京女子大講師、国立国際医療研究センター医長などを経て現職

実は米国に滞在していた二十年ほど前、子供たちへの「医療プログラム」を知る機会があり、私はいつか日本でも企画したいと考えていた。サマースクールの最初のレクチャーで「百人の中でがん

この日は、子供サイズの白衣を身に付け手には聴診器、化学療法の椅子に座るなどしたほか、手術用の手袋やガウンも着けて、目を輝かせていた。午後からは手術室や外来化学療法室、放射線治療室な

児童たちは、がん細胞を見る病理、負担の少ない治療の一つ腹腔鏡操作を体験。血圧測定や測れない痛みなどについても実習した。

予防や検診、治療を学ぶ

さらに心と体を大切に生きることや、医師や看護師でなくても病気の人の背中をさすって声をかければ「助ける

せられた。予想以上の手応えを感じた。がん教育の目的は検診率が上がるだけではない。が

「がん教育」2012年に閣議決定した「がん対策推進基本計画」は、がん教育のあり方を検討し、推進することを盛り込んだ。文科省は、本年度にモデル事業として全国70校で実施したうえで、16年度までに学習指導要領の改定の必要性を含めて検討する。厚生労働省研究班・小学校健康教育資料によると「がん教育」の主な内容は①どんな病気か②どのようにしてできるか③予防④検診⑤治療法⑥緩和ケア⑦みんなで向き合うなどが触れられている。

子どもたちが、がんについて学ぶ機会が増えている。帝京大学(東京都板橋区)では文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に選定されたことがきっかけで昨年「がんを知ろう!」と題し、大学医学部の講義室や実習室、病院などで、小学五、六年生を対象にサマースクールを実施。今年は七月二十六日に行った。

「五十人」のところで、多くの子供たちが手を挙げた。互いのために息をついた。その後、がんの発生メカニズム、たばこや酒の害や予防、検診などを講義。そして

人になれることも伝えた。児童たちからは「学んだことをお母さんや家族に話したい」「親戚の人ががんなので少しでも役に立てたら」。また「がんを予防することはとても大切。だから食事の栄養を考える」といった感想も寄

んには対処する方法があり、健康全体へ目をむけ、仮に罹患しても揺らぎを少なくすることを目指す。私は医療にはそれを支える仕組みがあり、子供たちにも社会のチームの一員であることを伝えることが大切と感じている。これは緩和医療からの視点に立っているのが特徴である。

各自自治体でがん教育が始まっているが、将来がんにかかる可能性や家族にがん患者がいる児童への配慮を含んだプログラムが策定されていくことを願っている。

OPINION

だんろん

国内生産1位のショウガを使った商品が山積みのお店=東京都中央区で

大(身長一七一センチ)お出迎え。高知城開催されている多曜日「の雰囲気」を味わうと、一階で運送された新鮮なぶ。地下一階には芸品。龍馬の図画「ちつくと」「ど、商品やポスター、言葉が躍る。二階では、カツオのど、自慢の食材を佐料理を味わえる。近年、人口減に県。力を入れるの地消「ならぬ」地。県産品を県外に活かすこと